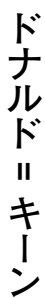


日本文学研究者



日本及び東南アジア

私は、アダム・オースティン・ジョーンズで生まれながら、オースティンの方は、昔の通りに日本を遊覧するものやうなものはほとんどありませんでした。オースティンの方は、オースティンに、たまにたまに日本から、そして、日本文字と日本文化に関する、長い一冊の道を歩き始めることになりました。そして、このたび、日本国籍を取得しました。今、私はオースティンで暮らしています。



十八歳の時に日本に入金した年は、第二次大戦中であり戦争に動員された。始めは一九四〇年でした。私は手廻しでいたが、戦争に際する最新「ニューズ」がわくわくして新聞が読まなくなった。このころは、戦争に対するくじけが本音だ。私の人生の中で最も精神的に苦しい時期でした。そんな時に遇っていた友人は、私に

歴史的な歌い手が通しつたのべれは、大
 事なものである。それは「ヨロイのタビ」のみで、
 又「ユメア」にある巻物残りの本を穿くあやう
 道に「何もなく立ち寄りました、すもむさくに」
 と「ヨロイのタビ」(漢文物語)といふ題名
 の本山に描きされていたのです。二巻セツト
 でのたうの四十三セシト、初めの目には「健
 者でたう、きく輪から、この作風は日本に
 関するものにながらぬ」と思いました。

少年も昔の日本の貴族の生活をよがいたその物語には、季節とともに移ろうがれらの生活と心情が生き生きとよがかれており、「葉すなわち美しい世界」が広がっていました。松



たれたるも、同じ日本人として、それを信じてゐるべきです。よい日本文学を讀むこと、そして、それに対する知識があることです。それによつて、自分の心を豊かにするたれば、外国のことをも、他の國語では當てはまらないけれども、日本語にあるところの國情になつてしまふ、日本語になつて、外國にあるところがある、日本語を知ることは日本語により深く知ることに出来ることと、世界人になつてゐることにあります。そしてこのことこそ、時空を越えて來つた、他たつたところの人間として、眞實なところの、です。

私が初めて日本文学に出会ったのは十八歳のとき、ニューヨークの書店で偶然のように手にした『源氏物語』でした。そのときは、まさか自分が将来日本国籍を取り、

『源氏物語』の世界には、争いがありま

私が十八歳だった一九四〇年当時、ヨ―

出す言葉一つをとつても、どうすれば美し

次は、折り方。どういうふうの手紙を折

きなかった世界でした。

談

一九三三年、ニューヨーク市生まれ。日本文学研究者、文芸評論家。コロンビア大学、同大学院、ケンブリッジ大学を経て、一九五三年、京都大学大学院に留学。一九五五年からコロンビア大学

作者・筆者からのメッセージ

「プラタナスの木」
(四年下)



プラタナスの木

中島 梨沙

「チーなんていつも遊んでいる仲間ば、せいり満ちた花嫁とハオリタスが好きなニスケ。それに、ロクでかあるんだ。本海は要井さんというのだけれど、どうやら、あんな、だから、いつのまにか、そうよばれるようになった。四年生になって、タウヌは別々になつたけれど、それまではずっと同じでタウヌで、家も通つたやうにまだに仲良くした。」



マリーちゃんは、集まることは用をいひの爲で、ハスケットとゴットといふの底さ
しなない。公費は、何も積んで置かれていないので潤まなくて、背の高いブラ
ズナスの木が一本だけ生えているから、ブラスナス公園といはれてゐる。中学生や
幼氣盛れの娘などとはめつたて来ないから、マリーちゃんたちは、自分たちの遊びで
きたり水鏡池があるのも見かねて、何よりらしいのは、この公園では、時限
によつて芝へ遊びかへてくることだ。他の公園では、芝へ遊びは禁止なのだ。
最近熱中しているのは、サウカー・リレーでは二スゲタ、三スゲには、サウカー
を走らぬときには、ハイソックスの中に入れておき替へる。本格的なのは、二人が
ゴーキルギーと叫びになり、二スゲでザアラバヤスをしらせる。子どもと子
女の間に二メートルくらいの空間があつて、そこがゴールだ。

つゆ明けのころからだろう。ブラスナスの本の下にある、背の小うなベンチに
おいしいさんがやつて来て、下ににしがたが、マリーちゃんたちも背ながらめて
るよになつた。

つゆ明けのころからだろ？　ブラタナスの本の下にある。喜い小さなペンチはおじいさんがやって来て、にこにこしながら、さーんたものさし方をながめていたよになつた。



はなじま
4年生のマーちゃん、花島君、クニスケ、アラマちゃん
は、仲良しの遊び友達。1本の古いプラタナスの木が
生える公園で遊ぶうちに、あるおじいさんと親しくな
り、木の根の存在や役割について教わる。夏休み後、
おじいさんのいない公園で、台風によって切り株だけ
になったプラタナスの木を目にして、4人は地中に広
がる根を思いながら、切り株の上に立つ。木の根がた
たえる力、その恵みをさわやかに描いた作品。



作家 椎名 誠

切り株が
教えてくれたこと

その本の名前は残念ながら忘れてしまった。子供向けに書かれた学習絵本とでもいうのだろうか、記憶の中にあるタイトルは「木」だった。木について書いてある。まず話は文字の説明から始まったように記憶しているが、最も強く印象に残ったのは木は上下対称である、というひとことだった。つまり地上から出ている木は、地中でも、地上で見る木と同じような姿をしているという指摘である。

全ての木にそれがあてはまるとは書いていなかったようだが、まあ、ある種の典型的な木を指しているのだらう。だからその木を何かものすごい力ですっぽり引き抜いてしまうと、地上から上の木と同じ形をしたものが地下から現れる。地下のそれは根であるが、考え方としては、その木を逆さ

にして地面に植えてしまふと、空中に広がった根は今まで地上に広がっていた枝と同じような状態になるということだ。

子供向けに書かれている本だから、深い植物学的な記述は、それ以上はなかったように思うが、多くの思考の中にその指摘は深く残った。木をそれまであまりにも知ら

その当時、ぼくはよく山歩きをしていた。どんな山でも、ふもとから高みを目指していく間にはおびただしい種類の樹木が茂っている。ああ、これらの木も地上と同じように大地に深く根を張っているのだなあとそれまで考えもしなかったある種の感動を得たのだった。高度を増していくうちに植生はどんどん変わっていき、もう大きな木は見られなくなっていく。山の岩盤がそれだけ固くなっているのだな、ということも今まであまり考えずにいたことだった。

山でも平地でも、ときおり大きな木の切り株を見る。いずれも何かの理由で伐採し

たのだろうが、切り倒された地上から上の木は、木としての生命を当然終えているはずである。けれど切り株から下の生命はまだ生きている。これまで支えていた地上から上の幹や枝葉をそっくり失った切り株を、今までにない目で意識するようになったのもその頃からである。

そのあたりに生きる人間たちにとって、切り株から下の根の世界はもう何の存在感も意味もなくなってしまうのだろうか。「空虚」という思いが頭をよぎったが、それでも地中ではその根を利用したおびただしい小動物や虫たち、そしてバクテリアなどが変わらず活発に生きているのだろうな、という少し違った見方もできるようになった。けれど人間になぞらえれば、木を幹から切り倒してしまうということは、その木のそのあと何年続くだろうかわからない、たぶん途方もなく長い、きつと人間たちよりもはるかに長い命を絶ってしまったということである。

話は変わるが、一九七八年から十年間ほど東北で大きな話題になった青秋林道（青森県と秋田県を結ぶスーパー林道）問題と

話は変わるが、一九七八年から十年間ほど東北で大きな話題になった青秋林道（青森県と秋田県を結ぶスーパー林道）問題と

いうのがあった。場所は白神山地。積雪量の多い奥深き山だから、道を作ったって一年のうち八か月は積雪で使えず、雪が消えても二か月は補修工事となるのが目に見える。なんとも意図不明の大規模工事計画だった。そのスーパ―林道を建設する予定のエリアに樹齢四百年ともなるブナの大木があつて、数百本ほども切り倒される計画になつていた。

ある保護団体に加わって、ほくはその反対運動のために、四季それぞれ道路建設予定現場に行つてキャンプし、道路建設中止のひとつの法律的素材になるクマゲラ（日本最大のキツツキ）の営巣地探しをしていた。切り倒される予定になつている数百本のブナは、それぞれ簡単には取り外せない金属製の赤いはちまきのようなものをくくりつけられていた。

結果的に言えばこの計画は阻止され、今は世界遺産となつて許可なしでは入山できないようになってゐるが、ちっぽけな力ながらぼくをその反対運動に駆り立てた源はその一本の木を描いた絵本だったのである。

しいな・まこと

一九四四年、東京都生まれ。作家。一九七九年より、小説、エッセイ、ルポなどの作家活動に入る。主な著書に、『犬の系譜』（講談社）、『岳物語』（集英社）、『アド・バード』（集英社）、『中国の鳥人』（新潮社）、『黄金時代』（文藝春秋）、『アイズプラネット』（講談社）など。

作者・筆者からのメッセージ

「なまえつけてよ」(五年)

詩人・作家
蜂飼 耳



なまえつけてよ

蜂飼 耳作
北沢 秀子 挿

学校からの帰り道のことだ。牧場のわきを通りかかっていた。春花は、そこに見えない子馬がいることに気づいた。
「つやつやした毛の、茶色の子馬だ。ちんちんまっして、どきどき、目が合った。子馬は、ぱちりとまばたきました。春花は、その美しい目に、すい、これこそ、なまえです。」



作業をしていた牧場のおばさん、手を止めて、春花に話しかけた。
「この、なまえはばかりなの。」
「名前、なんていうんですか。」
「春花はいい。」
「名前、まだ考えてないの、そうか、名前、つけてよ。」
「一生懸命のことから、春花、その小さな牧場のわきを通って通学しているの、牧場のおばさんは、いつのまにか顔見知りになっていた。でも、あいにく通学するだけだ。それなのに、子馬に名前をつけさせてくれるというのだ。」
「じゃあ、考えてみます。あしたまでに。」
「たのしみね。」
おばさん、子馬を見つめて、春花は歩きだした。歩きだした通学路だ。けれど、まるで知らない道を歩いているような気がしてくる。
名前をつけておぼえられるなんて、初めてのことで、これまでに自分でおぼえつけたことがある生き物と出会う。おぼえのときにくくった、おどろかしい金魚。それ



はるか
春花は、学校からの帰り道、牧場で、生まれたばかりの子馬を見つける。牧場のおばさんに、子馬の名前をつけてほしいと頼まれ、「明日までに」と約束する。しかし、翌日、状況が変わって約束が果たせなくなったことを、おばさんから告げられる。がっかりする春花だが、事情を知る、同じ組の転校生・勇太の思いがけない行動に心が少し明るくなって——等身大の子どもの関わりと心情を丁寧に描く。

紙の馬に 気持ちを託して

「なまえつけてよ」の主人公は、春花という小学五年生の女の子です。ある日、牧場で仕事をしているおばさんから、子馬に名前をつけてほしいと頼まれます。子どもにとって、それはとてもわくわくする体験ではないでしょうか。いつも眺めているだけの対象だった馬が、よりいっそう身近な存在となるような体験です。同時に、大人から頼まれたことなので、緊張や責任感も湧いてくるのです。喜びと迷いと緊張感が入りまじる、充実したひとときを春花は経験します。

この物語のもう一人の主人公といってもよい人物は、勇太です。しばらく前に、春花の小学校へ転校してきた勇太に対して、春花はどう接したらよいのか迷います。同級生ということもあって、もつと距離を縮

めたい、仲よくなろう、と思っではいるのですが、なかなかきっかけがつかめません。子馬に名前をつけることになった、と春花は伝えますが、素直に驚くのは、勇太ではなく、その弟である陸だけです。勇太のほうは、その場では、あまり関心がないような態度を示します。とはいえ、まったく関心がないわけではないのです。だからこそ、次の日、子馬の名前が決まる場へ陸とともにやって来るのです。

結局、牧場と子馬を取り巻く状況や都合が急に変わった結果、春花が一生懸命考え、胸に秘めてその場で運んできた名前は、つけられないことになってしまいます。もちろん、春花はがっかりします。でも、状況が変わったのだから仕方ないと、飲みこみます。その場に居合わせた勇太と陸は、春花の沈んだようすを目にして、どうすることもできず、少し慌てます。こんなとき、いったいどうしたらよいでしょうか。どんな態度をとり、どんな言葉をかけることができるでしょう。

翌日、学校で勇太が春花に対してしたことは何でしょう。勇太は、紙で折った馬を

春花にそつと渡したのです。紙の馬をひっくり返すと、なまえつけてよ、と書かれています。これは勇太なりに考えたブレゼントのようなものなのです。転校生で、不器用なところもある男の子ですが、同級生の落胆したすがたを目にして、自分なりに何かしたいと思ったわけです。がっかりしたその気持ちはわかるよ、と伝えたいのです。勇太は、それを何か行動で表したい、という気持ちになったのです。あの子馬の代わりに、この紙の馬に名前をつけてよ、というアイデアなのです。春花は、勇太がこんなことをしてくれるとは、と意外な気持ちになります。うれしさと、少し笑ってしまような気持ちが湧いてきて、春花の心は明るくなるのです。

勇太が春花のためにしたことは、ささやかなことかもしれませんが、けれど、それは確実に、春花の心を明るくします。ささやかなことであっても、相手に共感しておこなう事は、相手の心に届くものではないでしょうか。春花は、この出来事を通して、勇太の知らなかった面を知ることになります。優しいところや、思いやりのある面を。

友達の前まで知らなかった好ましい一面に触れることは一つの喜びです。勇太が渡したものは自分で折った紙の馬ですが、それは、勇太なりの優しさを紙の馬に託したという意味なのです。

さて、春花が考えた子馬の名前は何かだったでしょう。この作品の中に、それは書いてありません。あえて書きませんでした。子馬のすがたを思い浮かべながら、読者のみなさんに、それぞれ自由に考えていただきたいと思ったからです。一生懸命に考えた名前は使われない結果となりましたが、その代わり、思いがけず、春花は勇太の優しい面に触れることになりました。それは同時に、勇太を少し成長させることでもあったのです。

人の気持ちと向き合い、自分にできることは何かを考え、ときには思い切って実行することは、生きていく上で大切なことであり、喜びの源ともなることです。この作品では、とくにその点を表したいと思いましたが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

はちかい・みみ

一九七四年、神奈川県生まれ。詩人・作家。著書に絵本「うきわね」(フロンティア新社、小説「転身」(集英社)など。

作者・筆者からのメッセージ

「想像力のスイッチを入れよう」(五年)



ジャーナリスト
下村健一



事例と意見の関係をおさえて、自分の考えをまとめよう

想像力のスイッチを入れよう

下村健一

学校のマラソン大会で、あなたが半ばに入ってしまったら、あなたの周囲のマラソン大会の観客は、五倍だ、とどろく。観客がすわったあなたは、こう思うだろう。『観客より、五倍もすわってしまっている。』
しかし、先生はこう言うかもしれません。『でも、三半ばまで入らなければいい。』
このように、同じ出来事でも、何を基準と見るかによって、想像する内容がずいぶんちがってくる。
これは、学校や家庭での会話だけでなく、わたしたちは、テレビや

インターネット、新聞など、さまざまな手段で世の中の情報をとっている。こうした手段のことを「メディア」というが、これらメディアから発信される情報もまた、事実の全ての姿を伝えることはできない。それぞれのメディアは、光事象として、明瞭な形で現れて、情報を伝えているのである。
例えば、図①には、ある図形の半分が見えている。あなたは、これは、何の形なんだ、と思ったのではないだろうか。いっぽう、図②には、ある図形の半分が見えている。今度は、「四角形の半分かな」と思ったかもしれない。しかし、実はどちらの図形も同じ図形なんです。図①や図②を正確に半分に切った「四角形」は、切り取られた情報だけから全体を判断したことによる思い込みのことによる。
このような思い込みを減らすために、わたしたちは、あたえられた情報を事実の全てと受け止めるのではなく、情報の中で「想像のスイッチ」を入れてみることを心がけるのである。



「人気があるサッカーチームの新しい監督として、Aさんに注目が集まっている」という状況を設定し、メディアの特性や、情報を受け取る側の姿勢——「想像力のスイッチ」を入れることについて説明した文章。その想像の観点を、『事実かな、印象かな。』『他の見方もないかな。』『何がかくれているかな。』『まだ分からないよね。』という四つのキーワードとして示し、子どもたちに分かりやすい例を挙げながら説明を展開し、自らの考えを伝えている。

情報に振り回されないための、四つのハテナ

右のタイトルは、メディアアリテラシーについて講演をする際に私がいつも掲げている演題です。

①事実かな、印象かな？ ②他の見方もないかな？ ③何が隠れているかな？ ④まだ分からないよね？——インターネットやテレビや新聞から情報を取り込むとき、独り言のようにこの四つのハテナをつぶやきながら受け止めよう。そうすれば、もう簡単には踊らされなくなるよ、という「おまじない」のような話です。中学校の出張授業から経営者団体での講話まで、幅広い層の皆さんに、実際のニュースに当てはめながらお話ししています。

特に子どもたちの場合、家でテレビのニュース・情報番組と一緒に見ながら、横で親御さんがこの四つをただクイズのよう

につぶやいているだけで、とりあえず鵜呑みは免れることが出来るという速攻性があるようです。聴講後に、時々そんな我が家の実施報告をいただきます。

今回は、それを初めて小学生向けに、リメイクしてみました。本文中、『』で括った四つの言葉が、まさにこの「四つのハテナ」に該当します。「情報」というものを黒板消しに置き換えて①～③を喩えるならば、「事実には、印象という粉がよく付着している。この粉をちゃんとふき取って、黒板消し本体を見ようね」というのが、①の話。「長辺の方から見るか、短辺の方から見るか、あるいは斜めから見るか。見方によって、目に映る黒板消しの姿も変わるよね」というのが、②の話。「黒板消しについてはよく見えた。でも、チョークとか定規とか、他の物の存在を忘れてないかな」というのが、③の話です。

子どもたちからは、「②と③はどう違うの？」という質問が出るかもしれません。両者の違いは、明確です。②は、現にスポットライトの中に置かれている情報について、

見つめ直す作業。③は、そこから目を転じて、周囲の暗がりを想起する作業です。

——私がこうしたメディアリテラシー教育にこだわるようになった直接のきっかけは、一九九四年に起きた松本サリン事件でした。後にカルト団体の犯行と確定しますが、当初は第一通報者の会社員K氏が犯人扱いの報道をされ、それに乗った全国の人たちから、義憤に駆られた手紙や無言電話が、そのK氏の自宅に殺到しました。「早く白状しろ」「人でなし」といった言葉を浴びせられ、重症の被害者でありながら、社会生活にも深刻な影響を受ける二次被害に見舞われました。そのとき、警察情報を鵜呑みにしたメディアと、その報道を鵜呑みにした多くの善良な国民が、K氏にとって「加害者」になってしまったのです。

誰も真犯人を知らなかったんだから仕方ないよ、という話ではありません。③の思考態度さえあれば、「犯人はKだ」という即断ではなく、「犯人はKか、まだ見えないXだな」という保留が誰でも出来たのです。

こうしたことは、程度の差こそあれ、その後も続発しています。ライン、フェイスブック、ツイッターといった情報発信機能が当時より格段に発達している今、いつ、あなたの教え子が加害者の列に加わるか、分かりません。「四つのハテナ」の習得は、情報洪水の被害者にならないための自衛であると同時に、加害者にならないための責任でもあるのです。

冒頭の方で、この「四つのハテナ」は一回で効く即効薬だと申しました。そういう売り文句は少々胡散臭い感じがしますが(笑)、実はこれ、連続使用していると、じわじわ体質改善が図れる漢方薬でもあります。この単元が終わってからでも、子どもたちの情報摂取の機会に終わりはありません。ぜひ折に触れ、実際のニュースを教材に、「ちょっとここで、想像力のスイッチをオンにしてみようか」と、思い出させてあげて下さい。社会科で学ぶ《知識》と、国語科で学ぶこの《眼力》によって、子どもたちが情報化社会をしっかりと歩いてゆくことを、筆者として願ってやみません。

しもむら・けんいち

一九六〇年、東京都生まれ。ジャーナリスト、キャスターなど。東京大学卒業後TBSに入社。現職取材リポーターキャスターとして活躍。一九九九年TBS退社後は市民メディアアドバイザーとしても活動。著書に「メソッドは何を伝えないか」(岩波書店)など。

作者・筆者からのメッセージ